

私の高校時代の闘争

山村貴輝

私は父の仕事の関係で高校一年生は広島県呉市の高校でした（1966年）。それが、高校二年生の時これも父の仕事の関係で東京都杉並区に引っ越してきました。それに併せて高校を國學院大學付属久我山高校（以下「久我山高校」とする）に編入しました。元々私は東京都杉並区には中学生の頃ほぼ三年間通学し、クラスの10人ぐらいは隣にある都立西高に進学しているというウルトラ進学校でした。当時の高校進学は学校群システムではなく、通常の進学希望校を選択しそこを受験する、と言うシステムでした。そう言うことで久我山高校は第二次志望校（滑り止め）と受験生に位置付けられており、実際に久我山高校に編入すると都立西高に落ちた中学時代の同級生も何人かおり、編入生によくある孤独感・疎外感はありませんでした。因みに67年度までは男子校でしたが68年度からは隣接する岩崎通信(株)の中卒女子労働者の夜間高校となり、現在は男女共学です。

1, 編入後の私

久我山高校に1967年に二年生で編入し、所属サークルは中学時代から興味があった考古学部である。当時の久我山高校考古学部は親大学の國學院大學考古学研究室との関係が密接であり、土日は必ず遺跡の発掘調査参加か博物館・有名遺跡巡りなどをしており、平日は大学の考古学専攻課程の教科書で考古学の学理を学ぶと言う「考古学漬け」である。

さらに、68年5月に入ると戦前・戦後を通じて考古学の泰斗である山内清男先生（成城大学教授）から直接考古学を教わるという幸運に恵まれた。授業が終わりサークル活動も終わる16時頃成城大学の山内先生の研究室に出向きそこで考古学のレクチャーを受けて、さらにそこから先生のご自宅がある喜多見に先生とご一緒し、ご自宅でレクチャーを受けると言う日々を送るようになった。帰宅時間は22時頃である。もちろんこれは毎日ではなく、先生から課題を出されその課題を自習する日もあり成城大学に行くのは週2・3日である。先生から学んだものはオーソドックスな考古学研究方法論と、学問に必要な「批判的精神」であった。

2, 67年10・8羽田闘争

私は、中学時代からアサヒグラフでベトナム戦争の写真を見て本をクラスに持ち込んで議論をする一方（ベトナム戦争の問題を掘り下げることはなく）、「日の丸」を国旗として政府は法制化すべきだ、と言うどちらかと言うと体制派であった。そして、10・8羽田闘争をテレビで見ている「どうしてあそこまで激しいことをするのか」と言う疑問を抱き、翌朝高校の級友と話をし「よほどの強い決意・考えがあるのだろう」と言うことで一致し

た。さらに後日山内先生にも聞くと「あのような闘争こそが正しいのです」と言われる。さて、11月12日には第二次羽田闘争が起きる。また級友と議論をする中でそれらの闘争が「ベトナム反戦闘争」だと認識できた。68年1月には佐世保エン・プラ闘争、2月には三里塚闘争、王子野戦闘争として連続して闘われる。マスコミは「暴徒・暴力学生」と喚き立てるがそう言うレッテルに迎合する気はなく、逆に王子闘争を「見学」することにした。実際に王子闘争を見ていると全学連の学生が機動隊の凄まじい弾圧にもめげず、断乎として実力闘争を貫徹するのを見て“感動”した。それと同時に私の弟の家庭教師が都立大Hさんという学生であり、10・8、11・12共に参加したらしく闘争の後日私の家に訪れる時頭や腕に包帯を巻いており、おとなしい感じの学者肌の学生も激しい闘争に参加しているのだと感心した。

そして王子闘争の現場で中核派の機関紙「前進」を購入したが、読んでも内容は理解できなかった。そこで「前進」販売の担当者に「難しい」旨を伝えて、私が杉並区に住んでいることを告げると「杉並革新連盟」の事務所が西荻窪駅近くにあることを教えられた。そこから私の自転車で約15分の距離である。その後時々事務所に訪れるようになる。そして68年4月の初め頃久我山高校に反戦高協の支部があることを伝えられ、支部のメンバーと連絡が取れた。私の驚きは全学連と共に闘う高校生の組織があったことである。

3, その後

私は4月からクラス委員になり生徒会活動にも参加した。その中で当局の「週番制度反対」運動を行った。そもそも週番は旧軍の軍隊管理であり、高校においては「生徒が生徒を管理する」と言う反動的とも言える制度である。私は、週番責任者として生徒会会議で週番制度廃止の決議をとった。その旨を生徒会担当者教師に伝えると柔道場に呼び出され、柔道有段者である教師からいきなり寝技で首を「このアカ野郎」と罵られつつ首を締められた。そして教師の生徒会に対する恫喝で週番制度廃止の決議は覆られた。このような弾圧に怯むことなく民主化闘争は続く。具体的には当局の生徒管理のための御用組織である生徒会から、生徒の自立した生徒会への転換である。

私の高校は「忠君愛国」を高校のモットーにする右翼高校である。そして、前に記した反動教師もいる。しかし、多くの教師はヒステリックな右翼ではなくおとなしい。生徒会は御用組織とはいえある程度自主的な雰囲気があり、先に述べた週番制度廃止闘争も生徒会にかけてから行えば生徒全体に波及したと反省した。生徒会活動は監理教師の解任を求める運動を提起したが、ここで立ちほだかったのが民青である。我々反戦高協は非合法組織とは言え複数のサークルをおさえ、クラス委員にもかなりの賛同者がいた。それに比べて民青は生徒会役員に複数いるが目立って存在性はなかった。しかし、民青は生徒会での監理教師解任運動は当局を刺激すると言う。民青の対案は「生徒会活動の実効支配」と言う具体性がなく、無方針とも言える対案である。

そうこうしているうちに6・15ベトナム反戦・反安保集会有り反戦高協のヘルメットを初めて被り参加した。私の高校からは4名の参加で、反戦高協の隊列は100人以上いた。

隣に北園高校の茶色のヘルメットが2・30名ぐらいいて「他の高校でも頑張っているな」という感じを得た。デモは日比谷公園から明治公園までであり機動隊とのトラブルもなく、高揚感と軽い疲労感を感じた。

デモには初めて参加し高揚感を得たが、高校では民青との方針を巡り消耗な感じを得るが、考古学の学習には山内先生からの刺激のある指導を定期的に得ていた。それと、日大・東大闘争の情報も入り「時代的認識＝革命の現実性」と言う中核派の方針が納得できる状況にいた。だが、今思えば当時全学連運動と全共闘運動の位相と内実の違いを理解できず、党派の機関紙のみを情報源としていた私の問題として反省したい。そして7月立川基地反戦闘争に参加し、8月前半には1泊2日で反戦高協の合宿が都内でなされそれに参加する。そこで中核派の理論的・組織的原点である63年三全総および66年三全大の綱領的文書を学習した。問題はマル学同中核派高対部担当者の理論的レベルが低く、例えば「沖縄奪還論は分かるが北方領土はどうするのか」という高校生の質問に対し「それは北方領土奪還だ」と安易に答える始末である。やがてその理論的レベルに低さに反発し、失望した反戦高協のメンバーの一部が反戦高連に行く遠因となる。

そして9月3日にはソ連のチェコ侵略に反対するための緊急動員があり、全学連300名、反戦高協30名の部隊はソ連大使館に向かった。その部隊数が少ないことから機動隊のサンドイッチ規制を受け、その規制の中で機動隊によるテロ・リンチを徹底的に受け初めて国家権力の暴力を物理的に受けた。高校では民青との不毛な対立が続き民青から我々は「トロッキスト」というレッテルを貼られる。街頭闘争は10・8一周年にお茶の水駅から代々木駅に電車で移動し、そこから徒歩で新宿駅構内に入った記憶がある。だが、10・21新宿駅米タン阻止闘争の記憶が鮮明であり、10・8闘争の記憶は何故か薄い。10・21闘争は新宿駅東口に高校生は集まり、300名ぐらいの隊列ができたが全学連・反戦青年委員会の巨万の結集で、高校生はデモをする隙間もなく座り込むだけであった。その日の7時30分ごろ「騒乱罪適用が政府内で決まった。高校生はただちに帰宅せよ」との指示で私は帰宅した。

その後11・7騒乱罪適用粉碎！首相官邸包囲・突入闘争に参加し不当逮捕される。私は3泊4日で釈放されるが、心中「学校には漏れているな、最悪退学だ」と思いつつ登校した。多くの学友が心配する中で担任から校長室に呼ばれる。多くの学友も授業を放り出して後に行く。校長室では校長以下当局の指導担当の面々が座っている。そこで、校長が警察からの私の不当逮捕時の写真を見せ「君も立派な全学連だ。こう言う運動には有名高校の生徒が参加するのだが、我が校も有名高校の仲間入りだ」と言って笑う。そして「君はこれだ」と言い、頭に軽く拳を当てる。処分は無だ。形として「嚴重注意」だろうか。

校長室から出ると心配そうな学友が集まっている。私が「処分はなかった」と告げるとやんやの喝采だった。後で聞いた話だと、「停学・退学」の処分だと校長室占拠の構えだった、それも当局に漏れていたとのことである。

その後11月から69年1月まで東大闘争に参加する。学内では民青と怠い緊張感である。

69年2・11には清水谷公園で「紀元節粉碎！」闘争に参加する。参加の前段集会でプロ軍、ML派などの20名の高校生が西高生徒会室を襲撃して反戦高連のヘルメットを押収し、そのメットを旗棒にぶらさげて威風堂々と公園に来る。何故襲撃をしたのかと問うと「あいつらは気に入くない」という政治的には？の返事だった。

3月卒業式闘争は「会場をバリケードで占拠せよ」と言うのが反戦高協指導部の方針だが、決意した5・6名が占拠をしても教師4・50名で寸時もなく解除される。それよりも拠点校支援闘争に行くべきだと異議を申し立て都立大附属高校の卒業式闘争に参加する。

以上宜しく申し上げます。